# 人喰い人種について（59・3・17）

大橋　保夫（昭25文丙）

私は三高最後の卒業生でございます。大先輩の方々の前でどんな話をしたらよいものやらと大いに迷いましたが、現在もとの三高の身代わりとでも言うべき京大の教養部で、三高生と同じぐらいの年齢の学生を相手に授業をいたしておりますので、教室で話していることをご紹介してはどうかと考えました。現在の教師がどんなことを学生に言っているのだろうかという興味でお聞き頂ければ幸いでございます。題は『人喰い人種について』というので、ふざけているようですが、大変まじめな話のつもりです。

フランス語をやっている人間がなぜ人喰い人種の話などをするのかとお考えになるかも知れません。しかしこの題は、私自身の生活にいろいろ関係がございます。先ほど加古先生からご紹介をいただきましたように、五・六回アフリカに参りまして、今まで日本人のあまり行っていない奥地を訪れております。そのような場合には、もちろん前もってできるだけ文献を集めて、どう

いう人間が住んでいて、どういう生活をしているかを調べてから出かけるわけです。ザイールとか中央アフリカやスーダンなどでは、これこれの民族は人喰い人種だと言う報告がある（cannibalism reported）などと書いてあるところもあります。まさか自分が喰われることはあるまいと思うのですけれども、そういう所へ行く時は、あまり心穏やかではありません。現在でも、ウガンダのアミン大統領とか、中央アフリカのボカサ大統領とかが人肉を喰っていたと言われています。

また話はまったく別になるのですが、私はマルコ・ポーロの『東方見聞録』のテキストの研究をいたしております。ご存じの方が多いとは思いますが、この本の原本は、十三世紀に北イタリアで使われていた奇妙なフランス語で書かれております。日本の存在はマルコ・ポーロによってはじめて西洋に知られ、かつ黄金の国として紹介されたために、コロンブスをはじめ西洋人の関心を呼んでアメリカ発見の一因となったことは有名です。しかし同時に、マルコ・ポーロによって日本人が人喰い人種として紹介されたため、長くそれがヨーロッパにおける日本人観に大きな影響を及ぼしたことは、それほど知られておりません。御殿の屋根も床も厚い金の板でできた黄金の国というのも作り話ですが、なぜ日本人が人喰い人種にされたのか、これまた一つの謎であります。最近はさらに、フランス留学中の日本人学生がオランダ人の女子学生を殺して喰ったということで、ヨーロッパでもセンセーショナルに取り上げられ、やはり日本人は野蛮だという印

象を与えました。

こういうことがありまして、人間が人間を喰うということを人間がどう扱ってきたかということに興味をもちましたので、フランスの思想史について話す時間に、昨年は人喰い人種の問題を取り上げました。今日はその前置きの部分をご紹介しようと思っているわけでございます。

ヨーロッパでは昔から民話の中にも人喰いの話がたくさん出てきます。グリムの童話でも、ペローの童話でも、それはまったく類型化していて、非人間性・残忍さを意味するシンボルになっています。また世界のいろいろな民族について人を喰うという話がたくさんありました。ヘロドトスの『歴史』やストラボンの『地誌』などは有名です。マルコ・ポーロの『東方見聞録』でも、日本だけでなくて、スマトラとかアンダマン諸島とか、いろんなところに人喰い人種がいるという記述がございます。またヨーロッパの古地図には、あちこちに人喰い人種がいると記してあるのがたくさんありまして、人喰い人種についての関心は、ヨーロッパでは非常に高かったわけです。しかしそれは、事実と信じられていたにせよ話だけのことで、実際に人が人を喰うという事実をヨーロッパ人が目撃することは、ほとんどなかったと言ってよいと思われます。

ところがヨーロッパ人の食人に対する関心を一挙に高める事件がありました。それはアメリカ大陸の発見であります。アメリカの発見は地理学上の非常に大きな出来事でありましたし、また

世界史の一大転機でもあったわけですが、それまでヨーロッパにまったく知られていなかった型の文明をもつアメリカ・インディアンとの接触によって、思想史の上でも、人間観、異文化観に大きな転換をもたらしました。それは教科書で「ルネッサンスの人間観」というような題で教えている内容ほど単純なことはなくて、世界史上もっとも残虐な事件であるアメリカ・インディアンの大虐殺や、黒人奴隷貿易を可能にするような非人間的な面を含んでおりました。そのような枠の中で考えなければならないことの一つに、食人の問題があるわけです。

アメリカ発見とともにヨーロッパに一挙に拡がったのは、アメリカ・インディアンは人喰い人種だという情報です。十五・十六世紀には、アメリカ・インディアンの食人を記した旅行記などが相ついで出版されました。しかも挿絵入りのものがたくさんあって（図1、2）、大きな関心を呼びました。アメリカ・インディアンに捕えられ、他の人間が食われる状況を目撃し、自分ももう少しで解体料理して食われる寸前だったが、とつぜん敵が攻めてくるという思いがけぬ事情で助かって、その経験を報告するという形になっているものなどが典型的です。

しかし実際にアメリカ・インディアンに喰われてしまった白人の実例は確かめられていません。ですから、ほとんど実情の知られていないアメリカに行った冒険家が作り出した話と考えられる可能性があるわけです。実際に、この種の話の大多数は、冒険談を面白くする作り話に違いありません。ところが、それは全く根も葉もない作り話ばかりだとは言い切れないのです。アメリ

カ・インディアン自身がそのような食人の話をしていますし、食人の場合や、そのほか人間を犠牲に捧げる場面を描いた資料もアメリカ・インディアンの手によって残されております。それを見てヨーロッパ人は驚愕し、恐怖心を抱くとともに、その野蛮性に嫌悪の気持をもちました。後にはそれが、そのような蛮族を退治する使命感に変わって行ったのです。

これは、メキシコの征服後、白人の神父が現地の人間に自分たちの生活を説明させて、それを絵に描かせた、コデックス・フロレンチーナと呼ばれる文献の一部です（図3）。いまイタリアの

(1)

(2)

フィレンツェの国立図書館にその原本があります。神に捧げる生贄にされた敵の人間の魂が空へ飛んでゆくところです。下にいるのは、その前に犠牲にされた人だと考えられます。

このような場面を見ますと、なるほどアメリカ・インディアンの信仰・生活は野蛮な血なまぐさいものだという印象を持たれると思います。しかしこれらの絵はいずれも宗教的な意味をもっていて、しばしば神殿の中に描かれています。このような多かれ少なかれ伝説化しているものが現実のアメリカ・インディアンと同一視されるということがあったと考えられます。

(3)

次はゴヤの「子供を食べるサトゥルヌス」という大変有名な絵でございます(図4)。これはやはりショックを与える絵ですけれども、ヨーロッパの人間がこれを見るときには、自分たちの生活と同一視はいたしません。私どもが見ますと、キリストの磔刑の図とか、聖人の殉教の図にはずいぶん残酷なものがありますけれども、有難いと思って見る人には、見るにたえぬほど残酷であるがゆえに、そ

れだけ有難いということになるのでしょう。

はたして実際に人を食べるということがあったのかどうか。近年、いま述べましたような事情をもとにして、食人についての過去の資料を仔細に点検し、食人という事実が確かめられたことはなく、報告はいずれも作り話か伝聞であって、食人とは神話にすぎないという大胆な説を提唱した人類学者がありました（アーレンズ『食人の神話』岩波書店）。事実、伝えられている食人の情報の大部分は現実ではないと言えると思います。しかし世界各地のいくつかの民族について、信頼に値する人々から多くの食人の報告がありますので、あらゆる時代を通じて地球上に食人がまったくなかったと断言することは、これまた困難であります。古くはヨーロッパの旧石器時代の洞窟の遺物や北京原人の骨に食人の痕跡があるといわれておりますし、近年でも、南北アメリカやオセアニアの一部に食人慣習が存在したことを伝える民族学者の報告がいくつもあ

(4)

ります。

そのほか、アンデスの山中に不時着した飛行機の旅客が死んだ仲間の肉を食べて生きのびたとか、メドゥーサ号の乗組員が仲間を食べたという話はかなりの真実性をもっており、また第二次世界大戦中のナチスの収容所の悲劇や、太平洋地域でも戦地で食べるものがなくなって遂に人の肉も食べたという話はたくさんありますけれども、このような例外的な極限状況での話は、ここではしばらく別にして考えたいと思います。（文学作品でそのような状況を扱ったものに大岡昇平の『野火』や野上弥生子の『海神丸』があります。）

あまりにも周囲の事情がわからない原人の時代のことは別として、食人についての資料を調べて言えることは、われわれにわかる限り、仮に人が人を食べるという事実があったとしても、それは、われわれが牛や豚を食べるのと同じように蛋白資源として食べたものではないということです。つまり、「人喰い人種」というと好んで人を食べる、人肉を食べることが通常のことであるように考えられるのですけれども、狩猟に出かけて鹿や猪を取って食べるように人間を食べるために隣の民族を攻めたり、旅人を殺したり、ということは実際にはなかった、つまり食べるために人を殺すことはなかったと考えてよいと思います。

食人の実例は伝えられるよりはるかに少ないとしても、とにかくそれがあったと仮定すると、どういう場合に人を食べるのかが問題になります。第一に、身内の者が死んだとき。これは愛惜

と親愛の念の表現であったり、心の痛みの表現であったりします。第二は倒した敵。征服のシンボルであったり、相手の生命力を吸収して自分の力を増すと考える場合があったり、勇敢に戦った相手に対する敬意をこめたものであったり、その意味づけはさまざまです。負けた者にとっては、食われることがむしろ名誉ある取扱であったという報告もあります。自分の死後、死体を腐らせたり、土の中でうじ虫に食わせたりするより肉親に食べてもらいたいと述べているアメリカ・インディアンの記録もあります。さらに、アステカ民族の場合には、政治的・経済的支配のために犠牲が必要だったという説もあります。しかしいずれの場合にも、食人は儀礼的役割、意味づけをもっています。そして、それが例外的であって、通常は禁じられていること、本来はしたくないことをやるがゆえにこそ、意味をもつ行為となるのだと考えられます。つまり、人間は食べてはならぬものである。食べてはならぬものであればこそ、人間を食べることは厳粛な行為であり、特別重要な意味をもつことになるのです。

このような意味づけは、社会・文化によって異なります。それぞれの社会の文化・信仰を全面的には知らない外部の人間には、まったく野蛮な、非人間的慣習と見えるのです。これは、日本人の切腹が、白人のごく一部に理解を示す人があっても、外国では一般に極めて野蛮な、日本人の惨忍性を証拠づける習慣と思われているのに比較できます。

アメリカの発見以来ヨーロッパでは、食人についての関心が高まったことは先に申し上げたと

おりですが、これを野蛮だとする一般の考え方に対して、宗教上・政治上の理由から大量殺戮をやっているヨーロッパ人と、死んだ人の霊を弔い、または勇者の供養をするためにその肉を食べるアメリカ・インディアンと、いったいどちらが野蛮なのだろうかという反省が、早くも十六世紀から出ております。もっとも有名なのはフランスのモラリストのモンテーニュでありましょう。ヨーロッパは宗教戦争の時代で、たとえば一五七二年の聖バルテルミーの大虐殺では数万人が殺されました。そしてアメリカではスペイン人によって原住民の大量殺戮が行われているときでした。食人をやる「未開人」が、虐殺をやって死体を犬に喰わすヨーロッパ人よりはたして野蛮と言えるのだろうかと考え直すこの伝統は、インテリの世界には断続的に続いており、十八世紀の啓蒙思想家の時代には、ヴォルテールなどがやはり同じような反省をしております。

ヨーロッパ人でも、人の肉を食べるということに同じような意味づけを与えている例があります。欧米の人間が、アフリカやアメリカに食人の蛮習があるというようなことを言ったとき、それらの土地の人たちが反論するのによく引くのは、キリスト教の聖体拝領です。もちろん実際にキリストの肉を食い血を飲むことはできませんから、かわりにパンとブドウ酒をもらうわけですけれども、その意味づけはまさにアメリカ・インディアンの儀礼的食人と同じだし、また現在はシンボリックなものになっていても、その起原は地中海の東の地域の古い宗教的食人慣習だと考えられます。キリスト教の訓の中に「汝殺すなかれ」というのはあるけれども、「汝人を食うな

かれ」というのはありません。しかし、キリスト教のことですから、欧米ではあまりそういうことを大きな声で言うことは避けられており、むしろそのようなキリスト教以前の野蛮な宗教とは一線を画したのだというような点が強調されるわけです。早い話、キリスト教に繋がるユダヤ教徒が人肉を食い、人血を飲むと信じられていたことは『ヴェニスの商人』でご存じのとおりです。

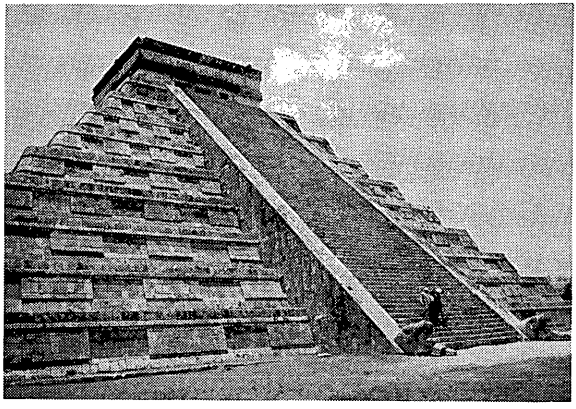
いままで、実際に人が人を食べるということがあるのか、仮にあるとしたら、それはどういう場合で、どういう意味をもっているのかということ、またそれが人喰い人種という言葉を聞いたときわれわれが抱く印象とはいかに違っているかということをお話してまいりましたが、さらにもう一つ、それが歴史に果した役割の観点から食人の問題を考えて見ましょう。

いま申しましたように、いわゆる「アメリカ発見」によって、「人を食う」ということについて違った考え方・異なる意味づけをしている二つの文明がぶつかることになったわけです。それまでは想定されているだけだった食人が現実のものとして現れることになったのです。（事実はどうであっても、新大陸からの情報は、ヨーロッパでは真実と考えられて現実味をもっていたのですから。）

さてこのような違い、いやむしろ違いに基づく偏見が、後に実際にどのようなことを引き起こしたか、いかに利用されたか、ということが肝心なのです。ご存じのとおり、アメリカ・インデ

ィアンはヨーロッパとは無関係に、非常に発達した文明をもっておりました。馬鈴薯、トマト、トウモロコシ、タバコなどの栽培植物はアメリカ・インディアンが作り出したものですし、天文学や暦法においても、ヨーロッパに劣らず進んでいたことが知られています。文字もありましたし、この写真（図5）のテオティワカンのような堂々たる大建築も作られていました。さきほどの、生贄の献げられた神殿の現物の一例がこれです。とにかく、オリエント、エジプトや中国に比すべき一大文明であり、ヨーロッパ人によるアメリカの発見はこれらの文明の破壊であったわけです。

つぎに見ていただく挿絵（図6）は、一見なんでもないようで実は重要な意味をもっています。右に見える船は、白人、つまりスペイン人などがアメリカにやってきているところです。左側は陸地、つまりアメリカで、よく見ていただきますと、人間の頭が棒に突きさしてあったり、食いかけの人間がころがっていたりします。いま、船で来たヨーロッパ人とアメリカ・インディアンとが争っているところです。これは有名なコロンブスの『航海記』の一六世紀の版にはいっている挿絵でありまして、アメリカを征服するということは、このような非人間的な人喰い人種を退治するという神聖な役割をもっていることを表現しているのです。つまり、「人喰い人種」神話、あえて「神話」と言ってよいと思いますが、この「人喰い神話」が、植民地化と、原住民の虐殺と、文明の破壊の正当化に使われるようになる、その始まりの頃の貴重な資料なのであります。



(5)

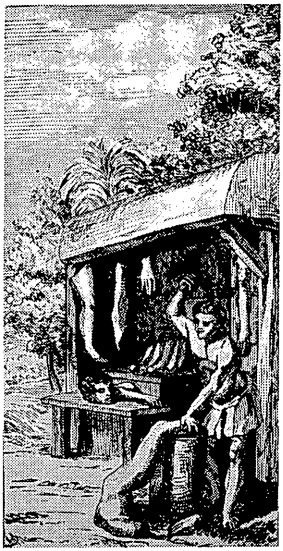
(6)

牲を出した奴隷貿易を行なって富んでいったのですから、まさに「人喰いの逆説」と言うべきでしょう。「人喰い人種」根絶の神聖なる使命はアフリカの植民地化にも大いに貢献しました。こ

アメリカでの現住民の殺戮は、百万ないし千万の単位で数える、おそらく人類の歴史でも最大規模のものになりました。ヨーロッパはその収奪で肥え太り、さらにその利益を投資してアジアやアフリカに植民地を拡大し、これまた数百万・数千万の犠

の絵（図7）は一九世紀の写真がない時代にアフリカを紹介した本の挿絵でありまして、絵が精巧になっているだけに迫真性があり、文章と相まって、征服の正当化に貢献したわけであります。「人喰い人種」だと言って「非人間」と扱うこと自体が実は極めて非人間的な行為であったと言わざるをえません。

アジアの東北端とアメリカ大陸とは、いまはベーリング海峡で隔てられていますけれども、昔はそこがつながっていました。アメリカ・インディアンは、先史時代に、この細い地峡を通ってアジアからアメリカに渡った人々であります。お尻には蒙古斑があり、写真などに御覧になればわかりますが、日本人そっくりで、われわれは親しみを感じます。ところが一六世紀頃のヨーロッパ人は「アメリカ・インディアンには魂があるかどうか、人間とみなすべきかどうか」を問題にし、虐殺、虐待、文明破壊を正当化したのです。そのとき、「キリスト教徒ならざる者は人間に非ず」とするキリスト教の独善的な考え方も大きな影響力をもちました。


(7)

私たちは、自分と同じ肌の色や顔形の

人に親近感をもち、自分の育った文化、自分と同じ言語や宗教を基準にして他を判断します。このようなエスノセントリズム（自民族中心主義）を脱却することはきわめて困難です。暴力による征服者の優越感がこのエスノセントリズムと結びついて、ヨーロッパでは人喰い人種論が特別の意味をもつに至り、それが殺戮残虐行為の正当化に役立つことになったという特別の経緯があるわけです。

このエスノセントリズムの克服は、文化人類学の出発点であり、また目標であると考えてよいと思います。しかしながら、世間のこの学問についての興味には危険な面があります。文化人類学は、主としていわゆる未開民族を研究の対象にいたします。その文化がわれわれの文化と異なるがゆえにこそ価値があるというのが出発点であるわけです。その相違点の意味づけは非常に謙虚になって気をつけてやらなければならないはずです。しかし、私たちはうっかりすると、自分たちの価値感、自分たちの文化の尺度をあてはめて解釈をして、ものを言ってしまうのです。文化人類学者といえどもその落し穴にはまることが少なくありません。それどころか、さきほど見ていただきました挿絵が当時の人々の興味をそそり世間受けしてベストセラーになったのと同じように、現在でも、文化人類学の名のもとに、むしろ世間の偏見に迎合して『最後の人喰い人種』とか、『私の父は食人種』などと言うような本を書いたり、その種の考え方で映画を作ってテレビで流したりすることが少なくありません。さきほど見ていただきました十六世紀の版画は、

写真のない時代には非常に現実感のあるものだったということを申しました。現代ではテレビや映画や写真などで「未開人」の生活から、ある一部分だけを取り出して実際にはない意味を与えるようにして世間の好奇心や偏見による興味本位のものがたくさんありますけれども、これは同じことをしているわけです。写真であり、学問的であるような装いをしているだけに現実性があり、人を信用させるので、よけいに具合が悪いのです。それを見て私などはほんとうに心が痛みますし、アフリカの国々の大使館の人なんかがカンカンになって怒っている場合がよくあるのです。考えてみますと、これはまったく「未開人」を食いものにして偏見を増幅して儲けているわけで、きわめて悪質で野蛮な一種の「食人」ではないでしょうか。

じつは、先ほど例に引いた『ヴェニスの商人』は、まさに同じように、シェークスピアが、当時の人々のユダヤ人に対する偏見と反感におもねって人気を得ようとしたものです。有名な作品であるだけに、この戯曲がナチスの残虐につながるユダヤ人に対する偏見を拡大するのにどれだけ貢献したか、計りしれぬものがあります。ユダヤ人が人肉を食べていないと知っている現在のわれわれは、これを単なるシェークスピアの文学的手法として扱いますが、同じような場合にアメリカ・インディアンやオーストラリア原住民やアフリカの話だと本当だと信じてしまうのではないでしょうか。その意味で、さきほど名前をあげましたアーレンズの大胆な説は正しいわけです。アミンやボカサの食人も、まず作り話と考えて間違いありません。

倒した敵の精力を身につけたり、心を痛めながら死者を弔ってその肉を食べたりする習慣がまったく存在しないと断言することは困難でしょう。しかし話題になる食人の大部分が作り話であることは確かですし、他方で、ナイーヴに食人を野蛮の象徴と見なすことが非常に危険であることは、おわかりいただけると思います。

はじめにマルコ・ポーロの話をいたしましたので、『東方見聞録』に出てくる日本人の食人の話をいかに考えるべきかを一言つけ加えましょう。

この記述は、日本を黄金の国とした話とあいまって、現在では、マルコ・ポーロの書の信用を大いに落しています。森鷗外はマルコ・ポーロが日本に潜入したと信じていたそうですが、もちろん彼が日本に来たという事実はありません。マルコ・ポーロの本の冒頭には、自分で実際に見たことは見たとして記し、人から聞いたことは聞いたこととして区別をして記す旨のことわりが書いてあります。日本の話はもちろん伝聞です。そのことを考慮に入れるならば、現在でも『東方見聞録』の全体としての信頼性は非常に高いのです。マルコ・ポーロの時代に、彼が「ホラ吹マルコ」としてからかわれていたというような話がよく書かれていますけれども、事実はそうではなくて、地理学上の知見を記した中世のあらゆる書物や古地図が『東方見聞録』を信頼し、もっとも貴重な資料として扱っておりますし、商人は貴重なガイド・ブックとして利用し、王侯は

この本に記されている所にしたがって東方政策を考えたのです。

それではなぜ日本についてこのような記述があるのでしょうか。日本には食人の慣習があったという証拠はありません。そして世界でも食人についての話がもっとも少ない国の一つです。そこで、昔からマルコ・ポーロに関心をもつ日本の学者がこの問題に注目してきました。有名なものに桑原武夫先生の父君である桑原隲蔵先生の「支那人間における食人肉の風習」という論文や、地理学者の石橋五郎氏の論文などがあり、「日本には食人の蛮習はなかった。『東方見聞録』の記述は、南洋のどこかの蛮族の話か、中国人の食人風習があやまって紛れこんだものに違いない」とされています。

マルコ・ポーロの本には日本以外にも食人の話が出ております。アンダマン諸島のところのように、記していることとほとんど同じ内容を記した文献が中国にあるものもあります。中国では、周辺に住む民族のいくつかを「人喰い人種」だと考えてきました。日本については中国にそのようなことを記した文献があったという事実を私は存じませんが、マルコ・ポーロは自分で作り話はしませんので、元寇のあと、そのような噂が中国にはあったのではないかと思います。

桑原隲蔵先生は、多くの文献を引いて、中国人には食人の忌まわしい習慣があったと述べておられます。たしかに中国には、食人について記した文献が少なくありません。私が中学のときに習った漢文の本にも、人間の料理のしかたの話が載っていまして、膾にするとか、あるいは湯を

かけて竹の手箒ではいて毛をとって食べるとか、焼いて食べる調理法もあるとか、薬用にもなるとか、いろいろ習ったことを記憶いたしております。人肉は最高の美味であったので、わが子の肉を皇帝に献じた忠臣の話などもありました。しかし恐らくこれは伝説です。

これを見ますと、事情はアメリカ・インディアンの場合と似ています。中国でも、食人は実際にはなかったのだと断言することは困難でしょう。しかし、それらの中国の文献を見ますと、食人の意味づけは中国とヨーロッパとでずいぶん異なりますが、どちらも食人を、禁じられた、例外的・極限的ケースであるがゆえに意味をもつ一つの記号としていると考えられます。

日本書記の巻十九、欽明天皇二十八年の条に「郡国大水出でて飢ゆ。或いは人相食む。」という記事があります。桑原隲蔵先生は、自分の国については、これは飢饉のひどさを述べる誇張的表現であって、中国の『漢書』にまったく同じ文言があり、その型に従っただけのもので、食人の事実はなかったのだと述べておられます。おそらくこれは、桑原先生のおっしゃる通りでしょう。しかし中国についての話になると、同じ『漢書』や『後漢書』などの食人についての古いいろいろな文献の記述を、事実を反映するものと読んでおられるのです。すべてがフィクションだとまでは言えませんがこれに対しては、かなり慎重になる必要があるでしょう。

私自身にもよく似た経験があります。アフリカで「食人習慣あり」と伝えられている地域へ参りますと、当然そこで本当に人を食べるかどうかを知りたいと思うわけです。尋ねると、答はき

まって「自分たちは人間を食べたりしない。しかし隣の部族は人を喰っている。（もしくは、むかし喰っていた。）」というものです。そして、桑原隲蔵先生のように文献こそ引きませんが、自説の裏付けとして自分が聞いているいろいろな話を述べるのです。そこで隣の部族のところへ行って同じことを尋ねますと、まったく同じ答が返って来ます。こうして、あちこちの民族について cannibalism reported という記録が残ることになるわけです。また、白人はアフリカの食人慣習を書き立てましたが、他方アフリカの各地で、白人は子供をとって喰うとか、アフリカ人の血をすする、と信じられていることは、多くの人が知っているところです。

これでわかりますように、「食人」とは、何よりもまず、人間が自分とは異なる、そしてよくわからない他の民族に対して貼りつけるレッテルで、とくに強くエスノセントリックな性質をもつものです。それはある場合には侮蔑の表現であり、ある場合には憎悪、恐怖の表現なのです。

マルコ・ポーロによって、日本が黄金の国として紹介されたことは有名ですが、食人の話と黄金国の話とは関係があるのだということを申し上げて、終りにいたしましょう。黄金の国日本に到達すべく、ヨーロッパ人は西に航海してアメリカを発見したのですが、そののちも、「人喰い人種」のいるアメリカに行くのは、まず第一に黄金を見つけ出すためでした。マルコ・ポーロにもとづいて南米に想定された「黄金郷」をエル・ドラド El Dorado と申します。実は、未知の富へ

の憧れ・期待がエル・ドラドを作り、未知の人間に対する恐怖・嫌悪が「人喰い人種」を作ったのだと言えるでしょう。人喰い人種と黄金の国は、まさに未知の世界に対する人間の素朴な感情の所産であり、表裏一体をなすものなのです。このことは、歴史的・地理的条件が少し違えば、虐殺と苛酷な植民地化を経験したアメリカ・インディアンの悲劇が日本人を待っていたことを暗示しています。

異民族を「人喰い人種」だと言うことがいかに危険であるかを述べて参りましたが、最後に少し「人喰い人種」論の弁護もしておきましょう。フランス人と中国人はどちらも昔から食人に大きな関心をよせてきた民族です。これは、ながらく他の民族と複雑・困難な接触をもってきた両国の歴史の裏面にほかなりません。そしてアフリカも、広いひと続きの仕切のない大陸で、民族間には激しい争いが繰り返されました。白人との接触は生死の問題でした。日本のように異民族との厳しい交渉が少なかった国では、人喰い人種の話は生まれにくかったのです。人喰い人種論の存在は、案外、国際性のシンボルなのかもしれません。

（京都大学教授）